死神になりました

深山　雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神になりました

【Ｎコード】
Ｎ１８２０ＢＡ

【作者名】
深山　雅

【あらすじ】
俺、死にました。そしたらやたら軽～いノリの神様が現れました。え、俺が死んだのってコイツのせい？しかも死神になれって？ふざけんな。
ああ、でも仕方が無いから腹括ってやってやるよ！

1　俺、死神になりました（前書き）

この作品は、ノリで突っ走っているギャグ作品・・・のつもりです。

主人公（女）の一人称が『俺』です。性格も男勝りな上にかなり凶暴です。そういうのが苦手な人は注意してください。

1　俺、死神になりました

ハイ、コンニチワ。
俺の名前は識沢（しきさわ）　秋（しゅう）。１５歳の高校１年生です、一応。
早速ですが、俺、死にました。
でも全然覚えてません。死んだ原因が何だか、まるで解りません。なのに何で死んでるってことは解るかっていうと、今俺が呼吸を必要としてないからだ。だもんだから心鎮めて耳を澄ましたが、鼓動も聞こえない。だから、多分そうなんだろーなーって。

あ、ついでに言っとくと俺、女ですから。一人称『俺』でも、性格こんなんでも、口が悪くても、男顔でも、女ですから。
大事なことだから２回言いました。
最後にもう１回。俺、女ですから！・・・一応。

まぁそれはそれとして、何で俺がここにいるか、教えてもらおうか。コイツに。
「じゃ、じゃあ足をどけなさい・・・」
あ、なんか言った。
俺の足の下にいるのは、１人の男。大体２０代中ごろで、金髪碧眼、美形、長身痩躯、白い服を着ていて翼を生やしている。
まぁ、わざわざ説明する間でもないな。
ぶっちゃけ、凄まじくありがちな神様スタイルだ。
それが何で床に這い蹲って足蹴にされているか？答えは簡単だ。

俺は気が付いたらここにいた。この何も無い、白の世界に。
で、ここどこだよ、とか考えて。
あ、俺ひょっとして死んだ？とか解って。
んで、ちょっとポケーっとしてたら、目の前の空間がパックリ裂

けてこの男が出て来たワケよ。
しかも。
『やぁやぁ、ちゃんと来られてるね！？』
と、すげーイイ笑顔でグーサイン出しやがった。それも両手で。
俺がキレても、可笑しくないと思う。まぁ、やりすぎた感はあるけど。
早い話、回し蹴りを叩き込んでやったんだ。米神に思いっきり。
んで、そのまま踏みつけてる。グリグリっとね。
でもこのままじゃ話が進まないから、取りあえず足はどける。
「ちょ～っと～！僕神サマよ！？この扱い酷くない！？」
やっぱ神か。けど軽いなオイ。
「黙れ。神らしく扱って欲しけりゃそれなりの威厳ってモンを見せてみろ。」
少なくとも、軽い笑顔とグーサインは無いだろ。

聞いた話を纏めると、やっぱり俺は死んでた。
けどその死因が・・・。
「オイこら、どーゆーこった。」
「いや、だからだね・・・」
「つまりは、テメエの怠慢だろーがっ！！しかも、それを誤魔化すためにあんな軽いノリを出して押し切ろうとしたんだろーが、アア！！？」
「ヒイィィィィィィ！！」
現在、神の胸倉掴んで揺さぶってます。
けど、無理ないって。
俺はどーも、コイツのせいで死んだらしい。

話によると、神々はそれぞれ担当する魂が予め決まってるんだと。
んで、コイツは俺の担当だった。
一柱の神が担当する魂は膨大な数に登るらしく、かなり多忙を極

めていたらしい。・・・だからって、そりゃねぇだろ？
神さま業務の１つに、寿命を迎えた魂の持ち主を・・・まぁ早い話、死なせるってのがあるらしい。
人生では１枚ずつ書類みたいなモンがあって、ソレには今生での寿命が記されてて、その日になったらシュレッダーにかけて処分するんだと。
なんだその処分方法は。
ちなみにソレはあくまでも『その時の人生』での書類で、『魂そのもの』の書類は別にあるらしい。住民票と戸籍の違いに近いって言われた。
で、だ。
問題なのは、コイツが俺を『間違って』処分しちまったってこった。
どうも、コイツが担当している別の魂が寿命を迎えたけど、忙しさに目が回って、そいつと俺の書類を取り違えたらしい。で、そのままシュレッダー逝き、と。
誤字じゃないぞ、念のため。
俺が再度ブチギレしても、仕方ないだろ？しかもその忙しさの理由が、フザケてた。
ただでさえ激務だってーのに、コイツときたら、前夜キャバクラでニャンニャンしてたもんだから朝寝坊して、それで遅刻したから午後からに仕事が詰り。結果、目が回るほどの忙しさと相成った、と。
否、てかなんで神がキャバクラ行ってんだよ。

俺は辻褄合わせのために、急死させられたらしい。普通に道を歩いてたら、落ちてきた植木鉢が頭を直撃したんだと。何、その死因。
ついでに言えば、俺と取り違えられた奴ってのが。
「１５歳のクッキーちゃんで～す。」
言われて見せられた写真に写ってたのは・・・。

「おいテメエ、こりゃ犬じゃねーかよ。」
「そ～だよ～。ちなみに♀で～す。老衰で死ぬはずだったんだよ～。いやぁ、同じ１５歳のオンナノコだってんでね～。間違えちゃった～。ゴメ～ンネ？」
軽すぎだこの野郎。よし、これからコイツのことを軽男（かるお）と呼んでやろう。
同じ１５歳でも全然違うだろうが。人間なら『これから』、犬だと『これまで』。確か犬の年齢って、人間に換算するには×７するんだっけ？１５歳だと１００歳超えてる計算じゃん。死んだって大往生だろ！？
「ついでに聞いておく。俺は本当ならいくつまで生きるはずだったんだ？」
「えーと～。」
軽男は台帳みたいなモンを捲り始めた。
「君は特に大きな怪我も病気もすることなく、至って健康的に１３２歳まで生きてギネス記録を更新するはずだった・・・ん、だって・・・。」
「・・・よし、取りあえずもう１回殴らせろ。」
「え、あ、ちょ、ちょっと、待・・・」
聞く耳持たん。
俺の右アッパーが、軽男の顎にクリーンヒットした。

「だから、ゴメンって！！」
俺のキレっぷりに、流石のこの軽男も殊勝に謝りだした。口調はアレだけど。それでも、正座で両手を合わせてる。
「許してよ～。ただでさえ僕、最高神サマにどやされてきたばっかなんだし～。」
語尾を延ばすな、語尾を。
てか、いるのか、最高神。やっぱ神にも序列があるんだな。
「でね、ここからが本題なんだけど～・・・ごめんなさいもう語

尾伸ばしません伸ばしませんからその思いっきり振りかぶった右腕を下ろしてくださいお願いします！！」

「・・・・・・・・・・・・」

仕方が無いから、下ろしてやった。

「うん、単刀直入に言わせて貰うとね？君、神サマになる気、無い？」

「無い！」

「・・・・・・そんなこと言わないでよ。でないと僕、また怒られちゃうよ、最高神サマに。」

「知ったことか。勝手に怒られてろ。てか、何の因果関係がある？」

よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに目を輝かせる軽男。

「それがね、君が死んじゃったのってホラ、こっちのミスでしょ？」

「お・ま・え・の！ミスだろうが！他の誰にも責任無ぇよ！『こっち』とか連帯責任っぽく言うな！」

「はいごめんなさい僕のミスです認めます認めますから蹴らないでくださいお願いします！！・・・コホン。とにかく、それであんまりにも申し訳ないんで、新たな人生のチャンスを与えようってことになったんだ。原則、生きとし生ける者は死した後には輪廻の輪に乗って新たな人生を歩むこととなる。まぁ、生まれ変わるってことだね。その場合、本来なら前世の記憶は受け継がない。まぁ、稀に覚えてるヤツもいるみたいだけど。でも、君は寿命前に死んだ。そのせいで輪廻の輪から外れちゃってさ。このままじゃ生まれ変われない。」

「じゃあ、生まれ変わらなくてもいい。さっさと天国にでも連れてってくれ。」

「アレ、君自分が天国に行けるコだと思ってるの？」

俺は肩を竦めた。

「そこまで善人とも思わないけど、地獄に落ちるほどの悪行を行

った覚えも無いからな。」
「・・・君、今、すっごい暴行を働いたよね・・・？」
「自業自得って言葉、知ってるか？」
「いや、でも、痛かったし・・・僕、一応神サマだし・・・」
「何か言ったか？まさか、文句でもあんのか、アァ？」
「言ってません文句なんてありませんだから指を鳴らさないで下さいお願いします！！」
よし、素直でよろしい。
「と、とにかく！最高神サマ曰く、これは大変な不祥事で、このまま君の魂が迷子になっちゃうと、僕が責任とって地獄に落ちなきゃいけなくなるんだよ！」
「落ちろ。」
「即答！？少しは迷ってよ！？」
知ったことか・・・ん？ちょっと待て。『魂が迷子になったら』？
「おい。俺今、魂だけの状態なのか？なら何でお前を殴・・・じゃない、ボコり・・・じゃない、制裁を与えることが出来てんだ？」
「・・・・・・・・・・・・テヘ？」
「・・・よし、そこに直れ。」
「ごめんなさい説明しますみっちりきっかり説明します一から十まで説明させて頂きますいえ説明させて下さいお願いします！！」
グバァと土下座してきたので、優しい俺は柔軟を中断して先を促してやる。
「えっとですね、早い話、今の貴方には肉体があります、ハイ。というのも・・・僕、地獄に落ちたくなかったから・・・」
「・・・最高神サマとやらは、何て言ったんだ？俺に決定権や拒否権は無いのか？」
「いや、その・・・」
「あったんだな、俺に・・・それをテメエが無断で押し通した、と。」
「だって・・・１５歳の女子高生が、こんな凶暴だなんて・・・・

・・あ、いやその・・・」
「つまり、ゴリ押しする気だったんだな？あのウザい笑顔と軽いノリで押し切るつもりだったんだな？」
「えぇ～～～～～～っと・・・」
「返事！」
「はいその通りですごめんなさい反省してますこの通りですだから乱暴しないで下さいお願いします！！！」
軽男、半泣きで五体倒置。
てか、そろそろ飽きてきたなこの反応。

軽男が落ち着くのを待って、俺たちは向かい合って座った。
「最高神サマが言うにはね、君の魂はもう既に輪廻の輪から弾かれてる。それなら、天国なり地獄なりに送るって措置の方が簡単なんだけど、さっき君自身も言ってたように、君ってば地獄に落ちるほどの悪行は働いてない代わりに天国に行けるだけの善行も行ってない。だから困っちゃったんだよねぇ・・・でも、やっぱりこの件に関しては君に責任は無い・・・ごめんなさい言い直します、君に責任は『一切』無いから、このまま迷子になられたら神の威厳に関わる。」
何を怯えてやがる、ただちょっと睨んだだけで。
「・・・あんな軽いノリで現れた時点でその威厳とやらはもう地に落ちてるけどな。」
「と、とにかく！だから最高神サマは、君が望むならば神に取り立てるって。」
「望まなかったら？」
「特例として、天国に行かせてあげるって。でもその場合・・・ミスを犯した僕が、その代償として地獄に行かなきゃいけないって言われて・・・つい・・・。」
「つい、俺の返事を聞かずに神になるよう申請した、と。」
「はい・・・。」

「取り消して来い。」
そんな、と軽男は青褪めた。
「何がそんな、だ。聞いてみりゃ、決定権は完全に俺に有るじゃねぇか。正当な権利だろうが。俺は天国に行きたい。」
「そんな、ね、殺生な！」
「俺の死の原因作ったヤツに言われる筋合いは無え！！」
俺の言ってることは、乱暴かもしれないけど正論だと思う。だからだろうか、軽男はグッと言葉に詰った。
「・・・・その、通りだけど・・・ねぇ・・・お願いだから・・・・。」
終いには泣き出す始末。中身はともかく、見た目は優美な美男子がハラハラと涙を流す様は、１枚の名画のようではあった。
地獄ってのは、よっぽど嫌なトコなんだろう。軽男にしては、珍しく本気で哀願している。
俺は善人なんかじゃない。けど、悪人でもないつもりだから、こんなマジ泣きされたら多少怒りも冷めてくる。
「ハァ・・・で？」
「？」
「早く話せ。取りあえず聞いてやるから。」
軽男は、それはそれは嬉しそうに微笑んだ。

「君には、死神になってもらいたい。」
「・・・・・・・・・・ハイ？」
ワンモアプリーズ？
「だから、死神。」
「・・・よし、やっぱりその最高神ってののトコ行って取り消して来い。」
「わわっ、待って待って！死神を誤解してるよ！・・・あのね、人間は死神を『死を呼ぶ神』だと思ってるのが多いみたいだけど、実際には『死を司る神』なの！例えば、死んだモノをあの世に送っ

たり・・・つまり、死神がいるから何かが死ぬんじゃなくて、何かが死んだから死神が行くんだよ。逆に、『死を司る』わけだから、寿命を迎えるはずだったモノを助けたり、ね。まぁ、イメージ通りに、寿命を迎えてないモノに死を与えることも可能だけど。」

あぁ・・・死神にも色々あるんだな。ソレは納得した。でも、何でいきなり死神？

「死神ってのはね、言ってみれば見習い神なんだよ。ノルマをこなした死神だけが、正式な神になれる・・・つまりは、神になろうと思ったら誰でも通る道ってことだね。かくいう僕も、死神をやってたことがあるし。」

「神話とかで、そんな話を聞いたことはないぞ？」

「うん、まぁ・・・わかりやすく言えば、地方公務員と国家公務員の違い、かな？僕たちのように、あらゆる並行世界を股にかけてるのが国家公務員。各次元を管轄してるのが、地方公務員。で、死神時代ってのは、国家公務員試験、かな？だから、そんな神話とかは無いと思うよ。」

・・・この軽男が国家公務員・・・キャバクラでハメを外しすぎて仕事で大ポカかましたコイツが・・・嫌過ぎる。

やめよう、こんなことを考えるのは。

「ノルマってのは？」

「魂の回収・・・まぁ、当然かな？死んだモノの魂を回収すればいい。ただ・・・その数が・・・。」

「数？」

「僕は、犬として死んだモノの魂を集めろってものだった。その数は１万。」

「１万！？てか犬！？」

「何として死んだモノの魂を集めるかってのは、最初に決められる。席があるから。君の場合は、何の因果か、人間として死んだモノの魂を集めることになる。空いてる席がそこだから。」

「へぇ・・・で、数は？」

「その・・・・・・・・２００億・・・・。」
・・・・・・・・・・・・あれぇ、何か耳が可笑しくなったよーな・・・。
「２００か？」
「２００億。」
現実は変りませんでした。
「待て待て待て待て待て。確か世界人口すら７０億に届いてなかったはずだぞ・・・？」
てか、お前が１万で俺が２００億って、何だよそれ。
「僕はそもそも、神となるべく生まれた魂だから。でも君は違う。その分、壁が厚くなっちゃったんだよね。」
「よし、やっぱ最高神のトコに行って来い。」
「待ってってば！何年、いや何十何百何千何万年かけてもいいんだよ。君のその肉体のスペックはもう神と同等で、不老だから！流石に不死ではないけどね。でもそれも、気を付けるのは怪我ぐらいで、寿命も病気も無いから！」
「冗談じゃない、何万年もかけてたまるか！！」
俺は人間だぞ！？少なくとも意識の上では人間だ！そんなのバケモノじゃねーか！
「バケモノって、失敬な！神だよ、神！！大丈夫、その内慣れるから！」
はっきり言って、慣れたくない、そんなもの。
あぁ、もう！！
「・・・１つ聞いておく。」
俺は頭を掻きながら出来るだけ落ち着こうと心がけた。
「そのノルマをこなして昇格した後は、どうなる？お前みたいに事務処理をしなきゃならんのか？」
軽男の答えは、否だった。
「色んなのがいるからね。人間でもいるでしょ、試験に受かってもそれを生かさない人とか。死神期間を終えても神にならず輪廻に

戻っていくモノもいる。逆に神になったとしても、業務は色々あるからねぇ・・・僕のように事務処理してるのもいれば、各次元の神々との連絡を請け負うヤツもいるし、創造神っていうの？新しく世界を造ったりするのもいる。」

「・・・・・・・・・・・ハァ。」

オーケイ、もういいや。

「解ったよ、神サマやってやるよ、それでいいんだろ！？」

もうやけっぱちだった。

「じゃあ、解ってくれたところで・・・これを。」

軽男が渡してきたのは、首飾だった。チェーンは細く長い。ペンダントトップ、というのかな、そこはチェーンと同じ銀色で円形をしていて中に五紡星が入っている。その5つの頂点にはそれぞれ小さな宝石が入っていて、時計回りに黄・赤・青・緑・茶の色に輝いている。そしてその中央にはそれらより2回りほど大きそうな黒い宝石。サイズ自体はあまり大きくないから、邪魔にはならなさそうだが。

「何だ、賄賂か？」

「違う！これは死神の証明みたいなモノなの！いい？」

軽男は真ん中の黒い宝石を指し示した。

「これが『門』。死したモノの魂は、ここからあの世に向かう。」

ほお。

「周りの5つの宝石にはそれぞれ特殊な力がある。まずこの黄色いのには、変化の力。神は不老だって言ったよね？でもこれを使えば、外見年齢を変えることが出来る。」

えぇ、何だそのテクマクマヤコン。

「次にこの赤いの。これは収納機能。色々道具を保管しておける。」

四次元ポケット？

「青いの。これは翻訳機能。言語だけでなく文字も訳してくれる

スグレモノ！」
今度はほんやくコンニャクか？
「緑のには、記憶能力。映像でも音声でも、何でも記憶・・・というか、記録しておける。」
ビデオ？いや、ＤＶＤ？
「最後に茶だけど・・・これはちょっと厄介。次元移動をする時に使うんだけど、それはとっても力を使うから多用はできない。」
あれ、よく考えたらこれって・・・モコナ？ツバサ？
いやいや、そんなことを考えても仕方が無い。
「これを受け取り、首に架けた時点で君は死神決定だ。以降、ノルマを達成するまでは外せない。あぁ、風呂や海に入っても錆びたりはしないからその点は安心してね。そしてコレの持ち主は君として登録されるから、他のモノが使おうとしても使えなくなる。」
「腹は括ったんだ、さっさとよこせ・・・決心が鈍る。」
言うと、軽男はさっさと渡してきた。よっぽど地獄が嫌なんだな。
「そして、これはオマケ。」
ごそごそと懐を探っていた軽男が取り出したのは。
「・・・・・・・・・・・・ｉＰａｄ？」
そう、生前よく見た情報端末だった。いや、俺個人は持ってなかったが。
「違うよ。これはね、今最新の神サマお役立ち必須アイテム、その名もＧＰａｄ！！あ、ＧはＧＯＤのＧね。これをこうすると・・・」
軽男はソレのパネルをポンポンと叩いて操作しだした。
「色んな情報が検索できるんだよ！普段はホラ、首飾の赤い宝石で収納しとけばいいし！」
パクリじゃねぇか！まんまｉＰａｄだっつぅの！
「何か頼みたいことがあったら、メールするからね。あ、逆に君がメール送ってくれてもいいよ？」
・・・・・・もうツッコむ気にもなれん。

右手に見た目ｉＰａｄなＧＰａｄ，左手に首飾。
どんな状態だコレは。

「さて、ここからはおねだりタイムです。何か特典が欲しかったら言ってね。１つだけ何でも叶えてあげられるんだ。」
「何でも・・・って？」
「例えば、綺麗になりたいとか、スタイル抜群になりたいとか、天才になりたいとか。ちなみに僕は、容姿をもらっちゃった。」
あぁ、転生トリップ（と言っていいのか、俺の場合）にありがちなヤツね。てか死神特典なのかよ、そのお綺麗な顔は。どうせならその残念な頭を取り替えてもらえばよかったのに。
まぁ、そうだな・・・あえて言えば。
「魔法が使えるようになりたいな。俺が知る限りのありとあらゆる魔法。」
「ありとあらゆる？」
「そう・・・そうだな例を上げれば、ハリポタとか、ドラクエ（ダイ大含む）とか、その他色々。」
「・・・・・・欲張り。」
「どこがだ。俺、こんなに謙虚じゃないか。」
お前の地獄行き阻止のために神サマやってやるってんだから、これほど優しいヤツはいないだろ？
「じゃ、とりあえず、それだけのスペックは与えておくよ。ただ、ちょっと制約がある。ちゃんとした使い方を知らないと、使えない。」
「えぇと、つまり・・・メラとかヒャドとか、エクスペリアームズとかのように呪文とかを知ってるのは使えるけど、呪文だとか技術だとかを知らないのは使える素養はあっても使えない・・・とかか？」
「理解が早くて助かるよ。ただ、素養はあるから学べば使えるようになれるよ。そうだな・・・初期魔力は、メラゾーマを２０連発

できるぐらい、にしとこうか。」
オイ、それポップじゃねぇか？とか、そんなことを考えてると、軽男が苦笑した。
「尤も、容姿や精神、頭脳と違って、身体は神のソレだから、そもそも肉体的なスペックって普通の人間の比じゃないんだけどね。初期値は生前と同じだろうけど、鍛えれば底なしだよ。頭打ちってのが無いから。頑張れば魔力も伸びると思うよ。」
そして、さっき覗いてたのとは違う台帳みたいなものを取り出した。
「さて、それでは旅先を決めてもらいます。最初の世界、どこにする？」
最初の・・・てことは、いくつかは回らにゃならんのか。・・・そりゃそうか、２００億の魂なんて、そうでもしなきゃ集められん。
「あ。ホラこれは？ドラゴンボール！」
「却下だ！」
「即答！？また即答！？」
「当たり前だろうが！ンなモン、死亡フラグ満載じゃねーか！！上手いこと回避しまくっても、最後にゃ地球ごとドッカーンだろうが！死ぬわ！！」
よくよく考えると、アレって登場人物で一度も死んでないの、ミスターサタンぐらいじゃね？悟飯も最後の最後で吹っ飛んだし。デンデはナメック星で死んでるし。
「で～も～。言ったでしょ、君は一応神サマなの！肉体的なスペックはあるの！」
「嘘付け！ドラゴンボールの世界じゃ神サマの力なんて軽くあしらわれてるじゃねーか！」
「一緒にしないでよ！言ったでしょ、アイツらは地方公務員で僕らは国家公務員なの！格が違うの！君だって一応こっち側なんだから～！」
「語尾を伸ばすんじゃねぇ！」

睨み合いの結果、ある方法で俺が勝った。
軽男は再び台帳を捲り始める。右の目が腫れ上がってるから読みにくそうだ。
え？何で右目が腫れてるのかって？それは、まぁ・・・睨み合いの結果だ。
「死人がたくさん出る方が、君だって早くノルマ達成できるのにい。じゃあコレ、ツバサ！適度に死人も出るし！」
「オイ、それって・・・『死者は生き返らない』てのが大前提だろ？俺矛盾しねぇか？」
っていうか、適度な死人って何だよ。
「だいじょーぶ！君は蘇生じゃなくて転生だから！」
「詭弁だ・・・」
「何とでも。事実だもん。」
「・・・・・・・・今は、止めとく。少なくとも、その詭弁を受け入れられるぐらい図太くなるまでは。」
「これ以上図太くなる気？・・・じゃあ」
「ちょっと待て、何だってそこから選ぶ？別にその辺の平和な世界でいいだろうが。」
トリップに興味が無いわけじゃない。むしろ大好きだ。
でも、本当に行ったりしたらきっと、好奇心を押さえられない。首を突っ込みまくって死亡フラグ立ちまくりだ。
「え、普通の世界がいいの！？」
コラ軽男、何だってそこまで驚愕する？
可笑しかないだろ、どんなに平和な世界でも人は死ぬんだし。それこそ時間があるなら、どんだけかけたって別にいいじゃん。
「じゃあ何のための魔法なの？」
「人生をより豊かにするためだ！」
「・・・具体的には？」
「その辺の他人があくせくしてる中、悠々自適にぐうたらに過ごすとか。」

「・・・・・・・・・君、いい性格してるよね。」
失敬な。誰でも考えることだろうが。
「とにかく、君が行く世界は基本、この台帳に書かれている世界だよ。そういう決まりなんだ。特例は、本部からの依頼があったときだけ。あ、本部って僕らのことね。ちなみにこの台帳に書かれた世界は、生前の君の本棚にあった世界たちだから。」
言われ、俺は台帳をひったくった。
コナン、犬夜叉、ハリポタ・・・確かにその通りだ。
「・・・理由を聞いても？」
「いや、あの・・・好きなんだろうなって・・・思って・・・。」
確かに、好きだ。好きだけど！
不穏な空気に気付いたのか、軽男は腰が引けている。
「それで？」
「ごめんなさい考えるのが面倒だったんですまぁいいやって思っちゃったんです反省してますだからメンチ切らないで下さいお願いします！！」
久々だな、このパターン。

結局、『丁重な』相談の結果、俺の初トリップ先はダイの大冒険に決定した。

「さて、じゃあ最後に注意事項です・・・。」
両目を腫らした軽男は、ちょっと視界が悪そうだ。え？腫れてたのは右目だけじゃないのかって？それは、まぁ・・・『丁重に』・・・ね？
「主な死神業務は魂の回収ですが、そのために本来の寿命が尽きてないモノを殺すことはできません。『門』は、その死神が殺したモノを通さないようになってます。」
まぁ、そうでないとノルマ達成のために世界を滅ぼすようなヤツも出ちまうかもだしな。

「逆に、本来の寿命よりも長生きさせた場合・・・死亡フラグを折るとか、怪我や病気を治すとか・・・の場合は、予約扱いになります。死んだ後は君のノルマに組み込まれます。」

なるほど、流石腐っても神、救済システムがあるのね。

「なお、君の担当は人間だけど、人間以外の生物の魂を送ることも出来ます。ただし、ノルマには組み込まれません。」

つまりは、本人次第か。

「それから、神ですので下僕・・・言うなれば眷属を得ることが出来ます。この辺の詳しい説明は、あとでＧＰａｄで確認してね。」

ＧＰａｄ・・・出番あるんだな。

「死神固有のものとして、３つの特殊能力が与えられます。１つ目は魂を見る力。君に解りやすく言えば、霊視能力かな？２つ目は寿命を見る力。対象がいつ何歳で死ぬのかが解っちゃいます。３つ目は、死んだモノに作用する力。対象がいつどんな時にどうやって何歳で死んだかというような、色んな情報を得られます。ただし、コレに関しては任意の能力なので、自分の意思で能力をシャットアウトしておくことも可能です。」

１つ目・３つ目はともかく、２つ目は・・・ＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥの死神の目か？いや、そりゃあ俺も死神には違いないんだろうけど。

「死神固有の能力ではなく、神サマ全体の特徴がいくつかあります。まず、さっきも言ったけど、不老です。君ならその１５歳の姿のままってことだね。明確な寿命もありません。老いることもなければ病に罹ることもありません。怪我にだけ注意してください。まぁでも、これもさっき言ったとおり、神の肉体はとっても頑丈です。車と衝突したとか学校の屋上から飛び降りたとか、そんなぐらいじゃビクともしません。あ、ついでに言うと、神サマの呼吸は特殊だから、水の中でも宇宙空間でもへっちゃらだよ。」

・・・なんか、割と早く『もう自分は人間じゃない』って思い知ることになりそうだな・・・。

「後もう1つ、神サマには生殖能力がありません。ぶっちゃて言うと、子供が出来ません。それに伴う現象・・・露骨な話、射精や生理といったモノもありません。」
それは・・・子供が欲しかったヤツにとっては嫌だろうな。俺は別に構わんが。
「えぇと、それから・・・これくらいかなぁ？あと気になることがあった場合は、その都度ＧＰａｄで確認してね？そして、これらのことを承認してくれるなら、首飾を架けて下さい。それで君は完全に神サマになります。」
言われ、俺は首飾を架けた・・・瞬間、何かがストンと落ち着いた。首飾・・・というか、宝石の力の使い方が何となく頭に入って来たのだ。
試しに、右手のＧＰａｄを意識してみる。すると、赤い宝石が一瞬光り、ＧＰａｄが掻き消えた。収納されたらしい。
「大丈夫そうだね。」
軽男も満足気だ。でも、正直コイツに褒められても嬉しくない。
「じゃあ、早速、いってらっしゃい。」
軽男が手を振ると、白の空間にパックリとした裂け目が現れた。ここから行けばいいんだろう。
「んじゃぁな～。」
俺はピョンと、その世界に飛び込んだ。ダイの大冒険の世界へと。

1　俺、死神になりました（後書き）

長くなりました・・・でも、1話で纏めたかったんです。
感想・評価など頂けると嬉しいです。

オマケ1　セルフCMをやってみる（by　筆者）（前書き）

今回は、短い上に読まなくても今後まっっっっっったく問題ないお遊びです。

オマケ1　セルフCMをやってみる（by　筆者）

それは俺と軽男が台帳を覗き込んで行く世界を相談していた時のこと。

「オイ、これは何だ？」

俺が指し示したのは『宝玉列伝　～琳悠国史～』という世界だった。

「こんなの、持ってないぞ？」

っていうか、聞いたことも無い。

「あ、それ？それは最高神サマの指示で死神台帳全部に入れられてるヤツなんだよ。」

「へぇ・・・どんな世界？」

「何でも、異世界魔法ファンタジーなんだって。『小説家になろう』にて連載中とか。でも本来は『宝玉本記』ってやつのスピンオフのつもりで考えられてたんだって。」

「・・・『宝玉本記』なんて、見当たらないが？」

「そりゃあ、まだ書いてないらしいから。」

「何だそりゃ。その作品の筆者には計画性ってモンが無いのか・・・ムフっ！？」

軽男が、がたがた震えながら俺の口を押さえた。

「それはダメだ、思っててもそれは言っちゃダメだよ、でないと僕ら、抹消されちゃうよ！？」

どーゆー意味だそれは。

「『宝玉列伝　～琳悠国史～』は、ある男の人生を記した壮大な伝記！・・・になる予定。幾多の試練を仲間と共に乗り越え、強く生きていく様を大長編でお送りする！・・・つもりらしい。例え何年掛かろうとも必ず完結させる！！・・・といいなぁ、って筆者は

言ってた。」
予定とかつもりとか、コイツは何にそんなに怯えてるんだ？
ジト目で見ると、軽男は慌てたように弁明しだした。
「だって、筆者がコレを完結させられなかったら・・・筆者は作品を完成させられないヤツってことだよ！？つまりは僕らも途中で止められてしまうかも・・・！！」
戦慄を感じているのか、軽男は未だに震えている。その様はいっそ哀れだ。哀れだが・・・。
うん、やっぱり訳が解らん。
俺はとにかく、その手を外せという意思を込めた拳を、顔面に叩き込んでやった。

オマケ1　セルフCMをやってみる（by　筆者）（後書き）

かくして、軽男はパンダ顔になった、と。

・・・どうでもいい話ですね。ちなみに『宝玉列伝　～琳悠国史～』は、私、深山　雅が書いてるオリジナル小説です。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

2　新たな世界につきました（前書き）

原作はまだ影も形も出てきません。

2　新たな世界につきました

白の空間から抜けた俺は、森の中にいた。
森とはいっても、密林ってほどじゃない。多少は開けている。

そして目下、問題がある。
目の前にモンスターがいるんだな、これが。
それがスライムとかだってんなら、わー流石ドラクエーダイ大だけどー、で済んだ。
でも、そんな可愛らしいモンじゃない。
でかい。身の丈は3メートル以上ありそうだし、やたらとぶっとい。しかも片手に巨大棍棒。
トロールだ。
あれ？トロールはハリポタだっけ？ドラクエだとトロル？あぁ、まぁ、どっちでもいいや。
体が薄緑いから、ボストロルだろう。
よかったー、トロルキングやダークトロルじゃなくて・・・って言ってる場合じゃねぇよ。
あの軽男め、よりによってモンスターの目の前に道を繋げやがって！
これはあれか、殴ったり蹴ったりしたことへの逆恨みによる嫌がらせか！？
とか考えてる間に、ボストロルは横なぎに棍棒でぶん殴ってきやがった！？
「うわ！？」
トロルが鈍いとはいっても、流石にこの距離では避けられなくて、咄嗟に腕で身を庇うのが精一杯だった。

勿論そんな程度じゃ勢いを殺すことなど出来ず、木々を薙ぎ倒しながら吹っ飛ばされてしまう。
「痛・・・く、ない？」
５，６本の木を倒してやっと止まったが、思ったよりも痛みが無いのに驚く。
流石にダメージ０ってわけじゃない。ちょっと息が詰ったような感覚はあるし、ぶつかった所に違和感はある。けど、痛いってほどじゃない。
あんなのに思い切り殴られれば、間違いなく体はグチャグチャのスプラッターになりそうなモンなのに。
そういえば軽男、俺の肉体はもう神仕様だから丈夫になってるって。
・・・って、なりすぎだろ！？ボストロルにぶん殴られてダメージごく僅かって、何だよ！？
あぁ、ほら、知能なんて殆ど無いはずのボストロルまで目を見開いておどろいてるよ。
でも、勢いを殺しきれなかったことを考えると、腕力は生前と大差ないみたいだな。
となると、脚力もそうだろう。トロルは鈍くても歩幅はありそうだから、走って逃げるのはキツイな。かといって、戦うには俺は経験値不足。
となると、アレかな、やっぱ。
「あ～らよっと。」
ピョンと地を蹴り、俺は宙に浮かび上がった。
よし、トベルーラ成功！！
フフン、いかに巨大なトロルでも、手や棍棒も届かないほどの上空には手出しできまい！
てか俺、飛んでるよ！？人類の夢、自由飛行だぞ！？よっしゃあ！
「じゃーなー、バッハハーイ！」
飛行に成功してちょっとハイになってた俺は、ちょっと古い捨て

台詞とともにその場を後にしたのだった。

しばらく飛んでいると、やがて身を隠すのに丁度よさそうな洞穴を見つけた。

取りあえずそこで落ち着こうと思って降りてみたが、着地に失敗してこけた。要練習だな。

入ってみると、洞穴の中は大きなモンスターが入るのには入り口が狭く、けれど中は広々としていた。一時的な隠れ家としては最適だ。

そもそも俺がトリップ先にダイの大冒険を選んだのは、経験値を付けるためだ。

生前の俺が色んなジャンルの漫画だの小説だのを集めていたからか、台帳には、思いっきり野次馬っても死亡フラグは立たなさそうなのもあった。

けど俺としては、出来るだけ早めに最低限のスキルや戦闘力を身に付けておきたかったから、敢えてこの世界を選んだ。

まぁ、放っといてもダイがバーン倒して世界守ってくれるし？上手いこと逃げれば何とかなるだろ。俺はとにかく、その辺のモンスターや小悪党と戦いながらちまちま実戦経験を積み、魔法の感覚だとか戦闘技術だとかを覚えたい。あ、あと、サバイバル技術とかもね。だって俺、今、文無しだし。

そしてその合い間を縫って、ダイたちアバンの使徒等を存分に野次馬るんだ！

さて、改めて今の格好を見てみると・・・うん、無理あるな。

シャツに短パン、スニーカー。多分、死んだその瞬間の装いなんだろう。

現代日本ならごく普通の、地味めの私服姿だけど、ダイ大、即ちドラクエというファンタジー世界では違和感がある。いや、違和感

しかない。
かといって文無しじゃあ、服も買えない。ダイ大では、ゲームのドラクエのようにはいかないはずだ。要するに、モンスターを倒したってGが降って沸いてくるわけじゃねーってこった。
ちょっと困った。
・・・あぁ、あれで何とかなるかな？
軽男が俺にオマケだと言って渡したアレ、ＧＰａｄ。わざわざ渡してきたぐらいだし、こんな時に役立って貰わないとな。
とはいえ・・・あの軽男が寄越したモンだ。あんまり期待はしてねぇけど。
俺は右手を差し出し、少し念じてみる。
すると、赤い宝石・・・略して赤石が少し光って、ｉＰａｄ・・・じゃねぇ、ＧＰａｄが一瞬で現れた。うん、案外便利だなコレ。
タッチパネルで操作するからか、電源スイッチ以外にボタンの類は見当たらない。
今更だけど、これって充電とか電池交換とかしなきゃならんのか？
まぁいいや、今はこれしか方法無いし。ポチッとな。
そしたら。
『ハァ～イ、こんにちわ！初めてのお客様ですね？』
急に幼女の声がした。いや、言い方が悪かったか。小さな女の子のような甲高い声が響いた。ＧＰａｄから。
『あれ？どうしたんですか？ひょっとして、私に音声ガイドが付いてるってこと、知らないの？』
聞いてねぇよ！初耳だよ！
『まぁ、でも今知りましたからいいですよね？初めまして、私はＧＰａｄのサンちゃんです！』
「・・・・・・・・・・ＧＰａｄには、個別の名前があるのか？」
『ありま～す！』
別にＧＰａｄに名前があろうが無かろうがどうでもいいが、何だろう、何だかコイツのノリ、あの軽男に似ているような・・・まぁ、

アイツと違って声が小さな女の子だからだろうか、そこまで腹は立たないけど。
てか、この声どこから出てんだ？スピーカーとか見当たらないぞ？
『それでは御主人様、あなたの名前を教えて下さい！』
どうでもいいが、この幼げな声と『御主人様』の呼びかけに、メイドを思い出した。それも女中としてのメイドではなく、喫茶店とかにいそうなメイドの方だ。
「識沢秋。」
『シュウさまですね？インプットしました。今後、私ことサンちゃんは、シュウさま専用のＧＰａｄとなります。あなたは・・・円形のトップに五紡星の紋章、中央に黒い石。新米死神ですね？ノルマ達成まで、一緒に頑張りましょう！』
「おい待て、この首飾のトップでそこまで解るのか？」
『はい、解ります。それは神の身分証明書のようなモノですから。』
知らなかった・・・てことはつまり、役職ごとにこれは違うのか。
『トップが円形なら魂管理局、五紡星は死神の印、黒い石は新米の証！早くノルマを達成して、新米の証である黒い石から一人前の証である透明な石になれるよう、一緒に頑張りましょうね！全力でサポートさせて頂きます！』
「・・・・おー。」
何と言っていいのやら。
死神は魂管理局ってとこの管轄なのかよ、とか。
透明な石ってそこは色じゃねぇのかよ、とか。
全力でサポートって、何をする気なんだよ、とか。
ツッコミ所は多々あったが、今ここでそれに言及しても疲れるだけの気がしたから、合いの手だけ入れておいた。
『さて、まずは何からなさいますか？』
「・・・・・・・・・・とりあえず、お前に充電の類が必要なの

かを教えてくれ。」
結局、ＧＰａｄは充電の必要は無いらしい。永久バッテリーなんだと。
『私は最新式ですからね～。しかも軽い上にコンパクトですし。昔は、もっと大きな上に折り畳み式で、文字入力にもキーボードを使わなきゃいけなかったＧＰＣとか使ってたみたいですよ？簡易式のでは最近、立体映像も映し出せる３ＧＳなんてものあるんですけどね～。」
それは・・・明らかに、ノートパソコンや３ＤＳのパクりなんだろうな・・・と、ちょっと頭が痛くなった。
ちなみに、Ｇはやっぱりｇｏｄのｇなんだそうな。

2　新たな世界につきました（後書き）

どうやらＧＰａｄは喋るようです。
音声機能は元々考えてたものですが、名前を付けたのは急に決めたことです。一々ＧＰａｄって呼ぶのが（書くのが）面倒だったんですよ・・・。
今後数回は、原作に入らず神様事情解説に費やすことになりそうです。よかったら付き合ってやって下さい。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

3　ＧＰａｄ取扱説明書（前書き）

サブタイトル通り、ＧＰａｄことサンの機能についてです。
原作は全然出てきません。

3　ＧＰａｄ取扱説明書

『それでは、アプリを表示しますね～。』
ＧＰａｄ改め、サンちゃんことサンのモニターには、幾つかのアプリが並んだ。
『何か新しいアプリが欲しい時は、この』
１番左上のアプリが選択された・・・サンの意思（？）で。
『ＧＩＳに接続してダウンロードしてくださいね。ちなみにＧＩＳは、神様情報サービスの略です。』
まんまインターネットサービスだよな・・・それって。
サンは止まらず、次々説明していく。
『本部より個人的な通達がきたり、知り合いと私的なやり取りをするときには、このＧメールをご利用下さいね。直接会話が必要な時は、こちらのＧｐｏｎｅですね。相手を映し出すことも出来るんですよ～？ＧＰａｄだけではなく、ＧＰＣや３ＧＳ、その他情報端末でもこれらはご利用できます！』
そういえば軽男も、メールするとかメールしてねとか言ってたっけ。
てか、Ｇｐｈｏｎｅって・・・テレビ電話？
『何か事件や騒動、その他ゴシップが発見された場合、こちらのＧＮに随時更新されま～す。これはご自分で好きなときに確認して下さいね？強制じゃありませんからしなくても問題はありませんけど、情報や流行に乗り遅れちゃうと後で後悔しちゃいますよ～？』
「・・・ちなみに、ＧＮってのは・・・」
『神様ニュースの略です。』
やっぱりか！
『こちらが、ＧＬＦ。細々とした色んなツールをご利用いただけます。時計は、その時にいる世界の時間を示すものと神様世界の時

間を示すもの、２種類をご用意しています。アラームも内蔵してますから、目覚ましとしても役立ちます！他、カメラ、ムービー、メモ帳、スケジュールに電卓・・・『

「ＧＬＫってのは、神様ライフキットの略か？」

『その通りです！流石シュウ様！！』

サンは感激したような声を出したが・・・解らいでか。パターンが読めてきた。携帯かお前は。

『こっちでは、色んな音楽がダウンロードできま～す。名前は』

「ＧＰｏｄか？」

『せ～か～い！やっぱりシュウ様、スゴイです！』

いや、感動してるトコ悪いけど、それもｉＰｏｄのパクりだろ？

『コレは、ＧＭ。色んな映像を保存しておけます。ＧＭってのは』

「神様メモリーの略？」

『惜しい！神様メモリーズです。次は頑張ってください！』

いや、別にクイズじゃねぇし。てか、果てしなくどうでもいいよ、その違い。

何だか段々疲れてきた・・・。

『こちらは、ＧＤになります。神様データの略です。』

「神様データ？」

それは予測がつかない。ちょっと興味が引かれた。

『正確には、シュウ様個人のデータを見ることができます。・・・ちょっと試してみましょうか。』

ピッ、という電子音のあと、表のような画面が出て来た。

＜識沢　秋　（シキサワ　シュウ）　：　外見年齢　１５歳

：　魂管理局所属　：　死神（担当・人間）＞

本日のノルマ達成数　：　０

本日の送魂数　：　０
本日の予約数　：　０

今月のノルマ達成数　：　０
今月の送魂数　：　０
今月の予約数　：　０

総ノルマ達成数　：　０
総送魂数　：　０
送予約数　：　０

ノルマ残高　：　２０，０００，０００，０００

『これが、ノルマデータ。シュウ様の場合、まだ１つも魂を送ってませんから、残高は丸々残ってますね・・・って、２００億！？マジですか！？』

ハイ、マジです。

『ふへぇ～・・・と、とにかく、ノルマ達成数はシュウ様が送った担当魂の数です。えぇっと、担当は人間ですか。送魂数は、それ以外の存在として死んだモノの魂を送った時にカウントされます。予約については知ってますね？ノルマ残高は、ノルマ－（総ノルマ達成数＋総予約数）です。ノルマ残高が０になった時、それがシュウ様の任期満了時になりま～す。』

ったく・・・いつになることやら。

『もうちょっとググれば、昨日・今週・先週など、更に詳しい履歴を見ることもできますよ。それから、メアド帳と電話帳もここにあります。表示してみます？』

「登録があんのか？」

『１件ずつあります。どちらも・・・同じ人、いえ神のようです

ね。』
えぇ、俺まだ知り合いなんて・・・いた、1柱だけ。
「じゃあ電話。そこに掛けられるか？」
『お任せください！』
初仕事に張り切ってるのか、サンの声は弾んでいた。
2、3回のコールの後、テレビ電話・・・否、Ｇｐｈｏｎｅに出たのは、やはりあの軽男だった。
『やぁやぁ、早速だｎ』
ブチッ！
俺は画面右下に出ていた通話オフボタン（？）を即効で押した。
あんなヤツ、顔なんて見たくねぇよ！
てか、何だよ、このアドレス。ｋａｍｉｓａｍａ．ｇｏｍ・・・神様ドットゴムって・・・神はアイツだけじゃねーだろうに、ダブったりしないのか？
『シュウ様ぁ、何で途中で切っちゃうんですかぁ？』
サンは不満げだ。もし顔があったら、唇を尖らせてるだろう。
「いいか、アイツから連絡が来ても出来るだけ繋ぐな。」
『・・・・・・・・・・はぁい、解りました。』
よしよし、従順でよろしい。

『このＧＱっていうのは、神様クエストです。』
「・・・今度はドラクエのパクりか？」
しかも何だ、『挑戦者求ム！』とか『薬を譲ってください』とか。
『あ、クエストを馬鹿にしちゃいけないんですよ～？結構役に立つんですよ？困った時に助けてもらったり、いざってときに仕事を請けて小金を稼いだり。重宝しますよ～？死神、特に新米だとすっごい安月給ですし。』
待て、今何か聞き捨てならないこと言わなかったか、コイツ。
『えぇ～っと、次からは生活に直結するアプリに入りますね。ま

ず、お買い物ならコチラ、Ｇｓｈｏｐをご利用下さい。』
「ｓｈｏｐ・・・店？」
『ハイ、そうです。こちらは神世界の最大手百貨店『Ｇデパート』の通販ページになってま～す。ゆりかごから墓場までをキャッチフレーズに、大抵のモノが手に入っちゃいます！・・・お金さえあれば。検索だってできちゃうんですよ～？例えば・・・『ドラクエ』で検索を掛けてみてください。あ、音声入力でもタッチパネルでもどっちでもいいですよ？』
俺としてはタッチパネルの方が馴染みがあるから、直接指を使って入力する。
ドラクエ、と打って検索してみると、色んな項目が出てきた。
武具・防具・装備品・薬・その他の５項目だ。
更に武具を選択してみると、今度は更に剣・ヤリなどの項目が出てくる。
試しに剣を選んでみると、商品画面が表示された。
商品名・値段・在庫数と共に、その品の写真まで付いてる。
まじまじと見ていると、ピロリンという音と共に『はがねのつるぎ』が光り、在庫数が５から４に減る。
『あ、今丁度どこかで誰かが鋼の剣を買ったみたいですね。在庫が減りましたでしょ？これを買うと、首飾の赤い宝石を経由して収納空間に来るんですよ～。ちなみに買い方は簡単！！欲しい商品を選んで、買い物カゴに入れるを入力、買い物がすべて終了した後、会計ボタンを押すだけ！会計ボタンを押すまでは、買い物カゴの商品も返却可能ですけど、買った後の返品は不良品以外受け付けないので気を付けて下さい。あ、ホラ見て下さい！』
再びピロリンという音とともに、今度は『どうのつるぎ』が光った。ただし、在庫が１３から１４に増えたのがさっきと違うところだ。
『買い物だけでなく、売却も可能ですよ。平たく言えば、リサイクルですね。』

・・・・・・・・・・便利だな、コレ。
『ちなみに、画面左上が、シュウ様のお財布の中身になってます。』
何、俺は文無しだぞ・・・と思ったら、何と『７２０，０００Ｇ』と表示された。
何故だ？
「てか、Ｇって・・・」
『神世界の通貨単位です。』
え、神世界もＧ（ゴールド）なのか！？・・・いや、待て、これまでのパターンだと。
「ＧはＧＯＤのＧか？」
『はい、そうです。』
やっぱりか！！どんだけＧ好きなんだよ、神世界！
「いや待て、それは後だ。それより、何で俺に金がある？」
『どうやら、シュウ様の生前の財産が持ち越されたようですね。千円以下は切り捨てらしいですけど。７２万ですか、普通の高校生だったにしては結構持ってたんですね。』
そりゃ、小学生の頃からのお年玉とか、高校入学祝とかを殆ど貯金してたからな。
「てか、Ｇって日本円と同じレートなのかよ・・・。」
『それについてはこの後、ＧＢの説明時に詳しくお伝えしま～す！』
「ＧＢってのは・・・」
『神様銀行の略です！』
あぁ・・・神様銀行（ＧＯＤ　ＢＡＮＫ）ね・・・。
『一緒に、死神の給与体制についても説明しますからね！』
そう、問題はそこだ！
安月給って、どういう意味だよ！

3　ＧＰａｄ取扱説明書（後書き）

ここで、次回に続きます。次回もこんな感じです。ちょいちょい小ネタを挟みながら解説していきます。

そしてＧＰａｄ、中々の便利グッズです。

感想、評価など頂けると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1820ba/

死神になりました

2012年1月6日11時48分発行